



Book Review

評者：池西静江

Office Kyo-Shien 代表／一般社団法人日本看護学校協議会会長

臨床判断ティーチングメソッド

著：三浦友理子・奥裕美／定価：2860円(本体2600円+税10%)

発行：医学書院／TEL：03-3817-5650



これからの看護基礎教育を考えるための、待望の1冊

令和2年10月30日付で第5次指定規則における「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」が通知されました。指導ガイドラインの別表3「看護基礎教育の考え方」に、「科学的根拠に基づいた看護実践に必要な臨床判断を行うための基礎的能力を養う」と示されたこともあり、看護基礎教育で臨床判断能力をどう育成するかに注目が集まっています。ですが、筆者自身も、臨床判断そのものの勉強は進んでも、その教授方法については、なかなかイメージ化ができずにいました。そんななか、まさに待望の「ティーチングメソッド」を記した書籍が刊行されました。本書は3部編成になっており、なかでも第2部第2章「臨床判断能力を育むための教育方法」ではいくつかの示唆が得られました。

筆者は授業づくりにおいて、①事例、看護場面を教材化し、リアルな場面で看護を考えられる授業づくり、②学生が自ら考えるように発問を効果的に取り入れた授業づくりを大切にしており、書籍を読み、この考えの重要性を再確認しました。と同時に、次の2つの方法で、臨床判断能力の育成につながるというヒントが得られました。

1つ目は「思考発話」です。前述したように筆者は「発問」を大切にしてきました。それだけに、指導者が「何に気づき、どう解釈し、だからこのように行動した」と先に語ることで、学生が考えなくなるのではないかと

いう危惧をもっていました。しかし、池田葉子氏やリサ・デイ教授の具体例を読み、まず、発問で、学生の思考・判断を促し、それを認めつつ、私ならこう考える、という助言をすることで、指導者の助言を意識でき、多方面からの観察を行うことで、学生の経験がより有意義なものになると思います。ここで筆者は「守破離」という言葉を思い出しました。先輩たちから「型」を学び、それを自分のものに取り入れ、学習を深化させるということだと考えます。

2つ目は「展開する事例提示」です。これまでの看護過程教育においては、特に講義・演習では、入院時などの1つの場面を切り取って、情報を提示し、問題抽出し、個別な計画を立てることを目標としてきた傾向があります。臨床判断能力を育成しようとするとき、計画を立てることより、何を行うかを判断し、実践して振り返ることが重視されます。したがって、1日目、3日目、退院時というように、経過を追ってその折々の状況を判断し、実践につなげる、という事例提示が必要となります。本書によって「教材」の使い方、提示の仕方など臨床判断を育成するために、考えなければいけないことが見えてきたように思います。

「ティーチングメソッド」を参考に、目の前の学生にどう教授するか、ここからはそれぞれの教員の力量が問われるところでしょう。